

令和五年度 東京純心大学 看護学部 看護学科

一般選抜試験（第二回）【国語】試験問題

試験時間 60分 問題は1～6ページ

注意事項

- ・ 解答は、解答用紙に記入すること。
- ・ 問題用紙は、試験終了後に回収する。

受験番号

令和5年2月19日

□ 次の文章を読み、以下の設問に答えなさい。

七月の声を聞けば、まず思い浮かぶのは、七夕祭りであろう。もともと牽牛けんぎゅうと織女おりむすめのふたつの星が、一年に一度、この日だけ会うことができるという伝説に基づいて、それにあやかり、①サイホウや文筆の上達を願う祭りである。

今日では、さまざまな願いごとを託した五色の短冊をつるした賑にぎやかな笹竹ささたけ飾りが七夕の代表的イメージで、私も子供のころ大いに楽しんだものだが、この風習は、江戸時代に手習い授業が②フキユウしてから広まったのだという。それ以前では、七夕は民間の習俗と重ね合わされて、多様なかたちを示していた。七夕の夜に罪や汚れを祓はらい、海や川に流す「七夕送り」もそのひとつで、青森の「ねぶた」もそれに由来する。また、七夕の前夜、文字や文筆の上達を願って硯すずりや机を洗い清める「硯洗い」という風習もあり、これは俳句の季語として現在まで伝えられている。

*

平安時代には、七夕の夜に詩歌の書を供える習わしがあったらしく、七月をまた「文月」と呼ぶのはそのためだという説がある。旧暦各月の呼称は、卯月うづき(四月)、早月(五月)、水無月(六月)など、多くが自然現象によっているのに対し、七月は(年末の「**(A)**」とともに)人事にまつわる呼び名となっているのも、七夕祭りの故である。『奥の細道』の旅の途次、「文月や六日も常の夜には似ず」と詠んだ芭蕉は、もちろんそのことを知っていただろう。(B)歳時記をひもといてみれば、正岡子規の「文月や硯にうつす星の影」という句も見える。

江戸時代に手習いが盛んになったことは、社会的に見れば、この時期、出版事業が発達した状況と無縁ではない。西鶴の『好色一代男』をはじめ、十返舎一九の『東海道中膝栗毛』、馬琴の『南総里見八犬伝』などの浮世草子、(ア)滑稽本、人情本、読本、さらには浮世絵の③リュウセイと結びついた絵草紙が人気を集めたことは、読書人口が急速に拡大したことを物語る。

*

興味深いことに、(I)ヨーロッパ諸国においても事情はほぼ同様であった。フランス革命の後に社会の中堅として登場したいわゆる上層中産階級の家庭では、読書の習慣が大きく広がっていった。新たに登場した大衆新聞がその呼び物のひとつとして連載小説を掲載

して評判を呼んだことなど、その間の事情をよく示すものだろう。

ピアノのお稽古などと同じく、読書は、いわば④ヒツスの教養として、また楽しみとして、特に家庭の女性たちのあいだに

⑤シントウしていったのである。フローベールの『ボヴァリー夫人』は、ノルマンディー地方のごく平凡な人妻が「情熱的な恋愛」に憧れて(イ)過ちをおかす話を主題としているが、エンマ・ボヴァリーのその憧れを養ったものも、少女時代に耽溺たんできした騎士道物語や伝奇小説などの読書であった。

このような社会情勢を反映して、絵画の世界でも、それまでにはなかった「本を読む女」という主題が生まれてきた。黒田清輝がフランス滞在中にサロンに送った「読書」図などその好例であろう。

この主題を描いた(ウ)逸品として思い浮かぶのは、トゥールーズ・ロートレックの「マルトX夫人―ボルドー」である。モンマルトルの歓楽街の画家というロートレックのイメージとはおよそそぐわない、堂々たる本格的な人物画である。ゆったりとした肘掛ひじか椅子に腰かけて、手にした書物(雑誌?)に読みふける女性の姿は、フランス世紀末がまた読書の季節でもあったことを物語っているだろう。

(出典 高階秀爾 著「七夕に思う「本を読む女」の誕生」(『朝日新聞』二〇一四年七月九日)による)

設問一 傍線部①⑤のカタカナを漢字に直し、(ア)②(ウ)の漢字の読みをひらがなで書きなさい。(送りがなを記す必要はない。)

- ① サイホウ ② フキユウ ③ リユウセイ ④ ヒツス ⑤ シントウ

(ア) 滑稽 (イ) 過(ち) (ウ) 逸品

設問二 空欄(A)と二重傍線部(B)について、次の問いに答えなさい。

(ア) 空欄(A)に入る適切な語を、漢字二字で記しなさい。

(イ) 二重傍線部(B)「歳時記」について、読みをひらがなで記し、どのような意味か簡潔に説明しなさい。

設問三 本文を踏まえて、七夕にまつわる行事の数々を、古いものからわかりやすくまとめなさい。

設問四 傍線部(I)について、「事情はほぼ同様」とは、何がどのようなものであるというのか、同様であるという事情が分かるように、本文を参考にしてわかりやすく説明しなさい。

□ 次の文章を読み、以下の設問に答えなさい。

自由の定義や①ガインンは一つではないので、私がこれから書くのは自由の側面だと思っていた。しかしとても重要な側面だ。

サッカーで(ア)卓越した選手はフィールドを自由に動き回り、球を自由に(イ)操る。他の選手たちがもたもたしている中で、卓越した選手だけが伸び伸び動く。競技の性格は全然違うが、将棋でも上手い人ほど駒の動きが速い。すぐく離れたところにいたはずの駒が②マタタく間に戦線に参加している。(A)駒が水を得た□のようなのだ。

サッカーや将棋にかぎらず、すべて競技にはルール拘束がある。(B)逆説的に響くかもしれないが、卓越した能力を(ウ)発揮して、自由自在に動き回ると見える人ほど、体や思考を競技それぞれの拘束に順応させている。つまり拘束の中にいる。拘束に体や思考を順応させることをトレーニングといい、端からはトレーニングは退屈で不自由きわまりないように映るのだが、その「不自由」は自由を獲得するための道のりだ。もともとトレーニングがたんに不自由なものでしかなかったら、競技中の自由な状態も出現しないだろう。前サッカー日本代表③カントクのオシムの練習メニューはとてもクリエイティブだったと言われている。

大事なことはルール拘束のある競技において、自由とは不自由の対立ガインンでなく、不自由のずっと奥にある状態のことだと知ることだ。競技者は拘束に対して主体的でなく他の誰よりも受け身になるから自由を実現できる。(I)創造性や想像力は何も拘束がないところから生まれるのでなく、拘束によってもたらされる。

小説というのは作品に着手する前に作者が、事前にテーマを決め、そのテーマに沿って、始まりから終わりまで綿密に設計図を思い描いてから書かれるものだと思っっている人が多い。作者は作品についてすべてを④ハアクして、登場人物の性格も、状況設定も、テーマを読者に伝えるための一種の道具であると。このように隅から隅まで論理的に作られた小説がないとは言わないが、これは拘束に対して競技者が主体的に振る舞うという⑤サツカクと同じことで、競技本来の運動性がない。一方的に勝てる相手と戦うようなものだ。相手が強いからこそ、こっちも思いがけない力を発揮できる。

小説では、風景や人の仕草などを綿密に書くという作業を通じて、作者の意図が乗り越えられ、作品着手以前には考えもしなかった姿に作品が発展してゆく。つまり、作者はテーマを事前に決めて、作品を主体的にコントロールするのではなく、受け身になって、競技者がそのつど状況を切り開くように書き進める。ということは、小説の展開の決定権は作者にあるのではなく、小説それ自体にある。私がこういうことを言うと、「信じられない！」と思う人が多いのだが、作者の仕事とは、書き進むにつれて小説が個別の作品として開始した運動を必死になって追いかけてゆくことなのだ。

美術でも音楽でも、作者の事前の設計図どおりに収まるようなものはない。優れた芸術作品はすべて、作者の意図を超える。(II) だからこそ芸術は一生の仕事に値する。作品が作者を超える状態を私は「自由」と呼んでいる。文庫になって先日出版された小説論の題名を『小説の自由』と名づけたのはそういう理由だ。関心のある方は書店で手に取ってみてください。

(出典 保坂和志 著「小説の自由」『猫の散歩道』 中央公論新社 二〇一一年二月二五日)による)

設問一 傍線部①～⑤のカタカナを漢字に直し、(ア)～(ウ)の漢字の読みをひらがなで書きなさい。(送りがなを記す必要はない。)

① ガイネン ② マタタ(く) ③ カントク ④ ハアク ⑤ サツカク

(ア) 卓越 (イ) 操(る) (ウ) 発揮

設問二 二重傍線部(A)・(B)について、以下に答えなさい。

(A) 空欄に入る適切な一字を漢字で、またその読みをひらがなで、それぞれ記しなさい。どのような意味か、簡潔に説明しなさい。

(B) どのような意味か、簡潔に説明しなさい。

設問三 傍線部(Ⅰ)「創造性や想像力は何も拘束がないところから生まれるのではなく、拘束によってもたらされる。」について、どのようなことを作者は述べようとしていると考えられるか。本文を参考にしてわかりやすく説明しなさい。なお、「トレーニング」という語をその中に入れること。使用した箇所には、傍線を引くこと。

設問四 傍線部(Ⅱ)「だからこそ芸術は一生の仕事に値する。」について、どのようなことを意味していると考えられるか。本文を参考にし、わかりやすく説明しなさい。